

‘identity’ の再構築

——ドラブルの *The Millstone* 一考察——

風 間 末起子

1. 理性偏重とリベラリズム

The Millstone (1965) はイギリスの現代作家マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble, 1939—) の第3作目の小説である。一人称の語りで進行するこの作品では、語り手の女性人物 Rosamund Stacey が、小説冒頭で次のような挑発的な言葉を投げかけている。

...they [my parents] believed in independence. They had drummed the idea of self-reliance into me so thoroughly that I believed dependence to be a fatal sin. Emancipated woman, this was me: gin bottle in hand, opening my own door with my own latchkey. (p.9)¹⁾

両親から自立という思想を徹底的にたたき込まれていた「私」は、他人にたよることを大罪だと信じるほどに自立した女であり、酒瓶を手に自分の鍵で自分自身の部屋に出入りできる女、いわば典型的な解放された女であると断言している。この発言には、言うまでもなく Virginia Woolf の *A Room of One's Own* (1929) のエコーとともに、*The Millstone* が出版された1960年代の雰囲気、すなわち第二波フェミニズム運動隆盛期の時代的空氣が反映されている。

自立に対する Rosamund の挑発的な言葉はさらに続く。彼女は姉一人と兄一人の三人兄妹だが、“a great feminist” (p.29) である母親は、特に女の子を男性と対等な人間に育てあげるために、試験やダンスにひるんでいる娘たちにエリ

ザベス一世の言葉を持ち出し励ます。「たとえペティコート一枚で追放されても自分にはやるべきことを行う勇氣があるのを神に感謝する」(p.29)を引用したのである。娘たちのちょっとした不安すら、努力によって克服できるという文脈の中で解釈し、叱咤激励する母親の教育方針には並々ならぬ信念があったことを Rosamund はからかい半分に男友だちの George に聞かせている。このように、Rosamund は、作品冒頭から、伝統的なりベラリズムの基盤となる理性への信頼や、自立というものを奨励された自分自身に懐疑的な目を向けている。

Rosamund は、ケンブリッジ大学で英文学を学び、現在はロンドンの大英博物館の図書館に通いながらエリザベス朝のソネット研究で博士論文を執筆する24歳の女性である。彼女は奨学金と家庭教師のわずかな収入で生計を立てているが、住まいは両親が所有するロンドンの一等地にある高級フラットである。両親は現在、アフリカの新設大学を軌道に乗せるために経済学教授として赴任中で留守である。自立を奨励されて育った Rosamund は、彼女自身もきわめて強く理性を信奉し、自我を理性でコントロールできるものだと信じ、逆に理性でコントロールできないものを恐れている。例えば、男友だちには常にそばにいてほしかったが、彼らと感情的、肉体的に深く係わること、つまり親密になることを恐れている。親密になれば Rosamund が男友だちに依存したり、同時に男友だちが彼女に依存したりするからだ。必要とされたり依存したりする状態は Rosamund の理性的な生き方の領域を越える厄介なものである。だから彼女は交際する時、“my system” (p.19) を効果的に使う。つまり、小説家の Joe と法廷弁護士の Roger の二人と同時に付き合っ、Joe には彼女が Roger と寝ていると思わせ、Roger にも彼女が Joe と寝ていると思わせる。このやり方で、セックスなしの男性とのつき合いが可能になる。犠牲にしたものは二人の男性からの愛と関心だったが、彼女は、“I could do without these things [interest and love]” (p.19) と言って深入り無用を宣言している。

このように、Rosamund は「人と人とを結ぶ絆」(“the bond that links man to man,” p.68) を巧妙に回避してきた。が、ある晩、BBC ラジオのアナウンサーである George との一回だけのセックスによって予期せぬ妊娠という事態を迎

え、身体と向き合うことになる。それまでの Rosamund は、知的なレベルでのみ生きてきたし、身体がないふりをしてきたと言える。‘mind’, ‘reason’, ‘logic’ といった男性の認識モードの中に逃げ込み、ロゴスの世界の中で成功を納めようとしていた。その姿は、のちに同居人となる女友だちで小説家志望の Lydia が書いた小説の主人公として登場する。小説の中では、Rosamund に似た主人公の未婚の母が博士論文や研究に集中するのは人生や現実から逃げるための手段である、と解釈されている。Rosamund はこの解釈に憤慨するが、Lydia は Rosamund の分裂の事実を的確に見抜いている。Lydia は、小説家としての自分の仕事は蜘蛛が身体の中から糸を絞り出すのと似た作業で、一方、Rosamund の仕事は自分の外側に存在する客観的な事実を扱う仕事、‘fact’ を分類する仕事だと言って、双方の生産の仕方の違いを説明している。創造と客観的分析の二つの対立軸に分類された二人の女性は互いに補完的な対照的存在であるから、Lydia の存在は Rosamund 自身の残り半分の彼女自身と言える。

Rosamund の理性尊重主義は維持され続ける。彼女は妊娠の事実気づいた日も日課として大英博物館に出かけている。はじめのうちは不安や恐怖で混乱して研究に身が入らないが、次第に彼女は見事に研究に集中し日課の分量をこなしている。この成果に深い満足感を味わう Rosamund について、Libby は統合した “self” を作ることを犠牲にして、男性性の認識モードを内面化していると指摘している。²⁾ Rosamund の分裂状態は、妊娠の事実を知っても、その事実を回避せんがために研究に没頭できるほどの彼女の知的能力によって強調されている。

こういう具合に Rosamund の分裂状態を熟知するようになると、我々は作品冒頭に出てくる彼女の自己分析を実に納得して読めるようになる。

My career has always been marked by a strange mixture of confidence and cowardice. (p.5)

「自信」は理性的で知的な彼女の能力、「臆病な心」は人との親密な関わり合い

への不安や恐れである。ここでは自信と臆病という間接的な表現で自分の分裂状態を分析して、作品冒頭でいち早く、自分自身の‘identity’の問題点を指摘していたのである。しかし、Rosamundは妊娠をきっかけに、自分の分裂状態への評価をくだすことになる。19世紀のヒロインは放縦な肉欲、つまり姦淫の罪(“adultery”)によって妊娠という罰を受けたが、20世紀のRosamundは理性への偏り、つまり禁欲の罪(“abstinence”)という20世紀的な新しい罪(“a brand new, twentieth-century crime”)によって妊娠という罰を受けたと解釈される。(pp.17-18)性を回避して理性にのみ頼った偏りのつけが妊娠という形で報復されたのである。

これ以降、Rosamundの知的なものと肉体的なものとの統合は一進一退で進んでいく。まずは妊娠の事実直面して、彼女は理性的だった自我が崩れ落ちていくことに気づく。

I was for the first time in my life completely at a loss. (p.33)

It was an unfamiliar sensation, the blankness that occupied my mind....
(p.34)

Rosamundは「生まれて初めて完全に途方に暮れて」、理性的に制御不可能な状態に陥っているし、「味わったことのない気持」と表現して、深く自分の感情に触れることになる。

次の段階で、Rosamundは健康保険病院(‘National Health clinic’) ³⁾を訪ねるが、その訪問を次のように述べている。

That visit was a revelation: it was an initiation into a new way of life, a way that was thenceforth to be mine forever. An initiation into reality.... (p.36)

「現実への通過儀礼、手ほどき」という表現は、今後の彼女の成長と変化を予期

させる。病院でたっぷり一時間十四分待たされている間に、彼女は待合室で見た患者たちを一応“companions” (p.37) と表現しながらも、上層中産階級で育った彼女にとっては患者たちの姿は会ったこともない労働者階級の人々であった。移民の女たち、みすぼらしい年寄り、やつれきった母親たち、そうした“a saddening sight” (p.38) を目の当たりにしながら、Rosamund は身なりのきちんとした明るい表情の男女、愛くるしい子供を連れた中産階級の母親たちはどこへ行ってしまったのかといぶかり、その場に強い違和感を感じて気を滅入らせる。二度目の通院で Rosamund は再び患者をじっくりと観察する。母親たちの顔には貧血と疲労がきざまれ、妊娠による肥満が原因で両脚が膨れ上がった女もいたし、足に静脈瘤が浮き出ている女もいた。

And there we all were, and it struck me that I felt nothing in common with any of these people, that I disliked the look of them, that I felt a stranger and a foreigner there, and yet I was one of them, I was like that too, I was trapped in a human limit for the first time in my life, and I was going to have to learn how to live inside it. (p.58)

この段階では、Rosamund は待合室にいる妊婦たちに何ら共通性を感じてはいない。それでも、自分も妊婦たちの一人にすぎないという思いを不承不承ながら認めていく。しかし本音を言えば、理路整然とした会話ができる看護婦と一緒にいるほうが肥満した妊婦たちと一緒に待合室にいるよりはずっと安心感を感じるのである。看護婦との会話は、“civilization” の世界であり、“Safe, chartered, professional, articulate ground” (p.59) であった。非理性の権化のような妊婦たちの一員になることは、Rosamund にとっては「人間の限界にハマった」という表現で形容される無残な状態なのである。

病院通いが回数を増すごとに、Rosamund は病院での手順にも慣れていくが、慣れていったのは診察のための手順ばかりではない。通院は彼女にとって一刻も早く逃げ出したい“an ordeal” (p.60) だったはずなのに、待合室で妊婦たち

が話すお産の経験談や聞きかじりの話しに Rosamund も次第に引き込まれていくようになる。未婚の母という立場や、学歴も所属階級も全く異なるのに、半年間通院するうちに今では病院の妊婦たちのほうに知り合いの誰よりも強い親近感をおぼえるようになっていく。「自然の本能的な力」は強いと彼女は痛感する。

Indeed, so strong became the pull of nature that by the end of the six months' attendance I felt more in common with the ladies at the clinic than with my own acquaintances. (pp.60-61)

待合室の妊婦に対して感じる仲間意識や、“the pull of nature” への実感，“my evident fertility” (p.42) への誇りといった気持は、肉体的なものへの率直な反応として確認できる。さらに Rosamund の妊婦への同胞意識は病院以外の世界にも広がっていく。街を歩く妊婦の数の多さに驚き、大英博物館にさえ自分と同じような知識人の妊婦が大勢いることに初めて気づく。Rosamund の視点が外の世界へと広がっていく状態は、彼女の今後の変化をいっそう暗示するものとなっている。

その変化は、Rosamund が自分のかつての分裂状態をからかうように、機知に富んだ逆説的な言い回しを楽しむ姿に顕著である。

Anyway, only posh middle class mothers nurse these days, on principle, and I don't believe in principle. I believe in instinct, on principle. (p.114)

母乳にこだわる母親たちが主張する「母乳主義」を Rosamund は信じない。彼女が信じるのは「本能」である。主義として本能を信じたのである。ここでは本能を信じると言っておきながら、それを正当化するために“principle”という抽象概念をあえて使う。妊娠する以前は“instinct”よりも“principle”を偏重していたのに、今では“instinct”に比重をおいている自分自身をからかう意

味で、“principle”という言葉で“instinct”に仕返しをしている。こうした言葉遊びはドラブルの筆の冴えが見える箇所である。さらにもう一カ所取り挙げてみよう。Rosamund が経験した出産の喜びなど、男友だちの Joe に言わせれば、女なら誰もが経験する最も退屈でありふれた体験，ということになるが、彼女は Joe の説を逆手に取る。自分はこれまで普通の女なら誰でも経験することを味わったことがないのだから、世間の普通の女が経験すると言われる出産後の陳腐な幸福感こそ、まさに自分にとっては希有で貴重な出来事となり得る，という論法である。孤立した個として生きてきた Rosamund だったからこそ、数多の妊婦仲間のひとりに成り下がってこそ特異な自己を実感できるという逆説的な理屈である。

このように、Rosamund は、‘identity’ の肉体的な部分を認識することによって自分自身へのより全体的な理解に至ることができるようになる。しかし、Moran が指摘するように、ドラブルが意図していることは、伝統的な母親役割への回帰ではなく、理性的な側面と、非理性的で生物的な側面の両方のバランスによって形成される ‘identity’ の価値にあると言える。⁴⁾

2. 分裂の克服—自己否定から他者との情緒的関わりへ

Rosamund の理性的な性格の一端を示すものとして、自己否定は作品の中で再三強調されている。Myer はその著書の中で、ドラブル小説の多くの登場人物が非国教徒の倫理的価値観を拒否するにもかかわらず、それを強く意識しそれに縛られている状況を分析している。さらに Myer は、ドラブルの作品では儉約、自己否定、勤勉などのピューリタンの倫理観は他人を幸福にするという有益な目的で機能した時のみ正当化され、*The Waterfall* (1969) の Jane や *The Needle's Eye* (1972) の Rose のような過度の自己否定は精神的障害の兆候となっていると解釈する。⁵⁾ また、ピューリタンの倫理観では、自己否定は、成長のプロセスのために必要な段階と考えられたことも指摘されている。⁶⁾ Rosamund の場合も、彼女は子供の頃、喧嘩やいざこざを起こすよりは不愉快なことを我

慢するほうがまじだったと彼女の自己否定が強調されている。

前章で眺めてきたように、Rosamund は、妊娠する以前は情緒的なもの、肉体的なものを、理性で制御できないものとして恐れ、それらを ‘femininity’ を連想させるものとして否定してきた。しかし、妊娠を契機に否応なく身体が発する生殖力や本能的な力を知り、それを誇りにさえ感じるようになっていく。ここには身体と理性の和解が見られる。しかしながら、自己否定を旨とする Rosamund にとって、肉体的なもの、特に妊娠や出産は他人への依存や他人の助けを必要とするから、そうした事態は彼女の独立を壊す脅威として捉えられている。できる限り奮起して彼女は出産を独力で乗り切ろうとするが、その彼女が赤ん坊の病気をきっかけに人間の肉体的な弱さ (“Flesh is weak,” p.124) に直面していくことになる。彼女は人に頼ることの必要性や、独りで切り抜けれない事態をも経験していく。ここで情緒的に深く人と関わっていく段階へと進むのである。

Rosamund が生んだ赤ん坊 Octavia は肺動脈に疾患が見つかり手術を受けることになるが、術後、彼女は面会を許さない病院の規則に背いて赤ん坊に会おうと病棟で看護婦たちと押し問答し、最後には悲鳴をあげて自分の望みの姿勢を貫こうとする。

So when she [Sister] started to push, I started to scream. I screamed very loudly, shutting my eyes to do it, and listening in amazement to the deadening shindy that filled my head. Once I had started, I could not stop; I stood there, motionless, screaming, whilst they [nurses] shook me and yelled at me and told me that I was upsetting everybody in earshot. ‘I don’t care,’ I yelled, finding words for my inarticulate passion, ‘I don’t care, I don’t care, I don’t care about anyone, I don’t care, I don’t care, I don’t care.’
(p.134)

これまでの Rosamund は自分の欲しいものを手に入れるのが不得手で、少しで

も反対されると容易に諦めてしまうタイプの間人だったが、そうした彼女の自己否定の態度が、娘にまで不利益を及しかねない事態に直面して、“Life would never be a simple question of self-denial again.” (p.132) と覚悟を決めるのである。子供のためなら嫌なことでもやらざるを得ないと、Rosamund はのちに George に語っているが、病棟での Rosamund の悲鳴騒ぎも平常の彼女なら思いもよらない感情の激発である。しかし、激烈な悲鳴という傍迷惑な行為によって、自分と他人との境界線を突き抜けて、彼女は初めて他人との感情的な関わり合い、ここではいがみ合いという関わり合いを持つことになる。悲鳴は伝達手段としての ‘non-verbal form’ である。Liscio は、ドラブルの第7作目の小説 *The Realms of Gold* (1975) の女性人物 Frances には言葉への過信がなく非言語の価値を認めていると指摘する。考古学者である Frances は、彼女の同僚たちが文明やロゴス（理性）を優先的に扱い、文字を残さなかった原始社会を重要視しない傾向に思いをはせる。⁷⁾ Rosamund も無意識のうちにロゴスの領域である病院の秩序と法則を叫び声によって溶解させる。悲鳴と同様に、「人なんか関係ない」という直情的な叫びも、ここでは逆説的に Rosamund が他人との壁を突き破って他人との感情的な関わり合いをもつ契機となる。人のことなど自分に関係ないと言いながら、他人の神経を逆なでし他人の感情に無遠慮に踏み込んで他人をかまいたてたのである。

この感情の激発の経験におよんでも Rosamund は内面的に分裂しない。むしろ、彼女の理性的な意識と彼女の抑圧されていた感情、この二つのものが均衡して彼女の中で統合している状態が強調されている。

I remember also the clearness of my consciousness and the ferocity of my emotion, and myself enduring them, myself neither one or the other, but enduring them, and not breaking in two. (p.134)

Rosamund の分裂への克服は、伝統的なりベラリズムの二項対立への挑戦と勝利を意味する。

ドラブルは、1980年のDiana Cooper-Clarkとのインタビューの中で、“emotion”と“reason”についての考え方を述べている。「イギリスの18世紀の哲学者David Humeの言葉“I might as well rely on the instincts of my heart”を賞賛しているらしいが、あなたは実際に“reason”よりも“emotion”や“instinct”に重きを置いているのか」という質問に対してドラブルは次のように答えている。

Yes,...You have to be in touch with your emotional center, your spiritual center. The emotional life, even though it might be more tragic, is more satisfying than the conscious intellectual life. The conscious intellectual life is very dry. This is one of the things that Rosamund suffers from. She suffers from dryness of the spirit because she's so clever.⁸⁾

ドラブルは、知性を軽んじているわけでないが、“emotion”が人間性に与える豊かさを強調しているようだ。

Rosamundも、他人の苦しみに単に理屈の上で(“in theory”)同情するのではなく、その苦しみを心で(“in my heart”)感じ取れるようになったのは、自分が苦しむ身となったからだと言う。(p.68)他人の痛みへの共感想像力に結びついている。Rosamundは17世紀の詩人Ben Jonsonが亡くなった子供を悼んで、「私の罪はおまえに希望を託しすぎたからだ」と歌った詩は詩人の真実の心の吐露だと感じ取る。そう直感できたのは、Octaviaの手術の前夜、不安におののく彼女が、もし赤ん坊が死ねばそれは娘を愛しているという自分の罪のせいだと妄信したからである。Rosamundは、愛によって人間は強くもなるが、同時に弱くもなり得ることを痛感するのである。生まれて初めて、自分以外の者のために恐怖を感じたのも、愛するがゆえであり愛が彼女を脆弱にしたのである。“a good Fabian rationalist”(p.126)として育った彼女が、娘のために神に祈るという行為にすぎたのも愛する者を失うことへの恐怖からである。

3. 代案としてのポストモダン・フェミニズム —リベラリズム, モダニズム, ポストモダニズムを越えて—

さてここで、Rosamund が 'identity' の再構築のためにたどることになった理性主義との葛藤や、'identity' 再構築のための代案となる方法について、リベラリズム、フェミニズム、ポストモダニズムの文脈の中で整理してみたい。

まず理性主義に基づいたリベラリズムは、男性性の価値として分離、距離、自立、客観性を結びつける。この価値観に基づいた男性の主体は、ジェンダー・バイアス上に成立していて、男性の自我は女性の他者性の上に置かれている。他方、女性性は不可視で周辺的なもの、排除されるべきものとして規定され、そうした女性性の他者性の上に男性の主体は形成されてきた。⁹⁾ 従って、伝統的なリベラリズムにおける 'identity' という概念は、西洋文化の中の男性中心主義的な秩序でありブルジョアの価値観と言える。Waugh が指摘するように、伝統的な心理学においても、'identity' 形成上の進歩は衝動や本能を抑えることで得られ、'maturity' のためのプロセスとして自立や分離への衝動が強調される。さらには、自我の独自性を形成するものとして分析能力と決断能力の発達が強調される。¹⁰⁾ このような文脈の中で、伝統的なリベラリズムにおいても心理学においても、女性は常に周辺的な存在として追放され続けてきたと言える。

ところが、1960年代から 'The Death of the Novel' が叫ばれ、その後、ポストモダニズムの登場によって 'The Death of the Self' が叫ばれるようになった。ポストモダニストは、人間の個々の主体 'subject' はブルジョアの産物であり神話であると宣言したが、この宣言は、階級、ジェンダー、人種、宗教などの理由から、支配的文化から閉め出され、周辺化した人々の文化と芸術を回復させる可能性を持つ考え方として注目され、期待が寄せられた。

しかしながら、ポストモダニストが普遍的主体性を解体していこうとする地点において、フェミニストはその逆の方向へと進んでいたのである。彼女らは女性の主体性を構築していく方向を目指していた。この地点において、フェミ

ニストと、ポストモダニストの関係はきわめてアンビヴァレントなものになる。フェミニストは、絶対的な他者としての女性性の神話の解体と脱構築を手がける一方で、これまで男性支配の文化の中で否定されてきた主体的な女性の‘identity’を求め、女性が真の主体となることの必要性を求めた。

こうして、20世紀後期のフェミニストや女性作家は、距離、分離、客観性、自立などの価値を強調する伝統的なりベラリズムに抵抗すると同時に、‘impersonality’の美学を強調するモダニズムや、主体を解体しようとするポストモダニズムにも同調できないことになる。この状況の中で、フェミニストは、主体を脱構築（‘deconstruct’）するよりも、再構築（‘reconstruct’）する方向を目指した。*The Millstone* では、Rosamund は上記の方向性を先取りする形で‘identity’を再構築している。彼女は、‘identity’の分裂や崩壊をくい止め、境界や距離の強調によって生じる孤立した個の形成に疑問を發し、むしろ他の主体との関係性を通して作られる主体の成立を目指している。こうした人との関係性を通しての‘identity’の再構築は、ポストモダニストがコミュニケーションや愛情を通して作られる人間関係を消滅させたことに対して、フェミニストが居心地の悪さを感じた結果であり代案であった。

Waugh は、精神分析の理論においても、‘selfhood’は関係性からよりも分離や他者（女）の存在の否定によって確立し、その主体は関係性やコミュニケーションを恐れ、主体成立のために他人をコントロールすることが必要とされると解釈されてきたと説明する。しかし、対象関係理論に基づく精神分析（‘object-relations psychoanalysis’）の登場によって、この立場をとる精神分析家¹¹⁾は、子供を快樂追求する存在としてよりも対象追求の存在として見て、人間の基本的な欲求は人間関係に対してであるという理論の中で、女性性や女性の‘identity’が抑圧されてきた源を探ろうとした。¹²⁾

少し長くなるが、例えば、対象関係理論に基づいた、社会心理学者のChodorowの理論を取り挙げてみよう。Chodorowは、女らしさ・男らしさのジェンダー・パーソナリティの差異が乳幼児期に世話した他者との対象関係、つまり母親への愛着と脱愛着の心理的過程から生じると説明する。Chodorowは

前エディプス期のジェンダー差異の観察を基礎にして新しい対象関係理論を生み出した。この理論は、自己を社会的諸関係から構築されたものと見なし、対象関係というのは、これら社会的諸関係の様々な側面が内面化されることを意味している。男女はそれぞれ最初の関係を母親と持つので、男の子の場合の自己規定は母親との比較においてのみ 'identity' を形成する。その過程で、男の子は母でないもの、女でないものを志向するという否定の形をとり、そのために男の子が成人男性となり、親になった時に養育を避けるようになる。逆に女の子の場合は同性である母親との一体感を維持していくため、自分の乳幼児期の経験や関係的な能力を抑圧する必要がない。女の子は 'identity' を他者との関係において規定していく。その一方で、幼児期に社会化する過程で、女の子は父親を外部に存在する成熟の理想的な形としてとらえ、逆に、母親にみられる育む能力や自己犠牲、依存などを女性性と結びつけ、そうした特質を社会的に劣ったもの無力なものとしてとらえ、女性の劣性の感覚を内面化していく。Chodorow は、男性支配の心理や男性の女性恐怖、さらには不平等なジェンダー役割を変革するには、子供が赤ん坊の頃から両方のジェンダーに頼って成長することが必要で、男女双方が子供の養育を対等に分担することが不可欠だと結論づけている。¹³⁾

こうした精神分析に依拠した形で、フェミニスト女性作家は 'identity' の再構築を目指した。彼女らは、ポストモダニストが個の疎外によって女性の 'identity' をも解体しかねない動きを危ぐし、それに代わる代案を提示しようとした。彼女らは、対象関係理論の精神分析家が説いた女性の 'identity' の規定の仕方、つまり、他者との関係において 'identity' を規定していこうとする点に着目し、コミュニケーションや人間関係を重視する方向性を代案として提示した。先にも述べたように、Rosamund の 'identity' の構築はこの路線に沿った例として見るができる。次の章では Rosamund が 'identity' を再構築する途上で、彼女が共同体の中で自己の位置づけをしていく過程に注目してみたい。

4. 共同体の中での 'identity'

ドラブルは、Diana Cooper-Clark とのインタビューで、William Wordsworth や Arnold Bennett を尊敬する理由をたずねられた時、彼女自身が理想とする作家像について述べている。

The writers that I most admire are the people who strive to retain their [ordinary human] links with the community and not they become very rarefied, like Henry James.¹⁴⁾

ごく普通の登場人物たちに、共同体とのつながりの中で人生を把握させようとする作家、それはまさにドラブル自身の姿でもある。その意味で、ドラブルは George Eliot をも非常に尊敬し、インタビューの中ではその点も言及している。¹⁵⁾ ドラブルは、Eliot が共同体の中で多くの登場人物を有機的に結びつけ筋を展開していくその技量と、Eliot が人間社会を展望する時の幅広い視野を尊敬しているようだ。

さて、ここで *The Millstone* に目を移すと、Rosamund はドラブルが重要だと考えた共同体から孤立して生きている。臨月の頃、Rosamund が気分転換のために始めたジグソー・パズルは、断片化した自我のイメージの比喩として見るとおもしろい。ジグソー・パズルの一つ一つのピースは 'fragmentation' の状態、いわば社会からの孤立状態を表現している。前章で述べたように、社会から疎外された個というものの以前に、主体そのものの断片化や解体を提唱したのはポストモダニストだった。逆にフェミニスト女性作家は 'identity' を再構築する作業を始めていった。彼女たちは、ポストモダニストと同じように、伝統的なりベラリズムの二項対立、すなわち男らしさ／女らしさ、理性／情緒、高級文化／低級文化、支配的／周辺的などの境界を曖昧にし、「普遍的な主体性は支配的文化や力関係とは関係なく存在しうる、あるいはそれに優先して存在する」

というリベラリズムの理論にも抵抗して、アイデンティティ・ポリティクス批評を生み出した。

しかし、ポストモダニストが主体そのものを分散させ、主体への信念を枯渇させることで‘identity’を脱構築していこうとした地点でフェミニストはポストモダニストと袂をわかち。主体は解体されるべきで、重要なのはテキストのみ、言説は言語のレベルのみにあるとする理論は、女性の経験の死へとつながる。そこで、フェミニストは‘identity’を再構築する方向へと進んでいった。心理学の分野では、フェミニスト精神分析家は、女性の‘identity’の源泉を、自己と他者の境界や分離に主眼をおくペニス羨望理論とは異なった理論の中に求めようとした。彼女たちは、前エディプス期に注目して育てる人（女）と、育てられる赤ん坊との関係から生じてくる成長のプロセス、対象追求による成長のプロセスを分析する対象関係理論に基づいた精神分析に移行した。その意味で、現実の人間関係や継続する歴史の中で構築される‘identity’というものを築き上げようとした女性作家たちの動向は、対象関係理論による精神分析に連動している。¹⁶⁾ Rosamundの‘identity’の構築も同じ路線をたどり、個人は歴史や共同体に根つき、価値観を共有し得る他人と結ばれているというドラブルの信念に符合したものとなっている。

上記の事柄をドラブルはもっとわかりやすく表現している。ドラブルは、‘manners’とはフォークを右手で使うのを禁止することではなく、時には言われなくても食事の後片づけをすとか、人と会話する時に相手の気持を配慮する心づかいとか、そういう類いのものではないかと言っている。¹⁷⁾ ドラブルにとっては、‘manners’は道徳ではなく‘communication’であり、人との関係性を重視するのが‘manners’の真髄なのである。

さて、ここから、Rosamundが共同体との相互依存を構築していく様子を見ていこう。Rosamundは、人は他人に依存するものという事実をまずは他人に頼られることによって実感する。妊娠5カ月目に入った頃、通院先の待合室で、彼女は二歳ほどの男の子と生後9カ月ぐらいの赤ん坊を連れた妊婦から、診察の間だけ赤ん坊を見てほしいと頼まれる。穏やかな寝息をたて鼻をたらし

口をあけて眠っている赤ん坊を膝にかかえながら、Rosamundはずっしりとした暖かな身体から命の重みを実感するのである。

I sat there with this huge and monstrously heavy child sitting warm and limp upon my knee, his nose slightly running and his mouth open to breathe. I was amazed by his weight;... it was the first time I had ever held a baby and after a while, simultaneously with preoccupations about damp on my coat, a sense of the infant crept through me, its small warmness, its wide soft cheeks, and above all its quiet, snuffly breathing. I held it tighter and closed my arms around it. (p.70)

帰宅途中で Rosamund はこの妊婦を再び見かけ、啓示のようなものを受ける。この女は “like a warning, like a portent, like a figure from another world” (p.71) だと表現され、Rosamund は自身の先例であり前兆であることを悟るのである。彼女はこの女のように自分も見ず知らずの赤の他人に助けを求めて生きていくだろう予兆を受けとめていく。

実際に、Rosamund は、同じフラットの住人で普段はつき合いのない中年夫婦にもものをたのむことになる。彼女は人にもものをたのむ時に感じる異常なまでのためらいを克服しようとする。クリスマス・イヴの晩、風邪気味の娘のために薬局に出かけたいと思うが、Rosamund はほんの20分でも赤ん坊を残して出かけることに不安を募らせる。そこで、いつもは敬遠していた階下の夫婦を訪ねて事情を話し赤ん坊のことをたのんでいくのである。Rosamund はその隣人夫婦の親切な対応に驚くが、彼らが優しく接してくれたのは、自分が正直に心を開き窮状を打ち明けたからだと推測する。簡単に手を貸せることなら誰でも人は他人に手を貸すし、逆に簡単な事柄で人から助けてもらいたい時もある。Rosamund は人間関係は相互補完的であり相互依存的なものだと実感するのである。

ドラブルの作品において、‘community’ は重要なキーワードである。これに関

するインタビューの中で、ドラブル自身のユーモラスな返答には説得力がある。ドラブルは人と人とを結ぶ絆についての質問に次のように答えている。

Rosamund, through the baby, is forced to encounter the outside world. The idea is that once you're forced to make contact through your lover or your child, then it's all right somehow. The other people are there. They're not just part of the images of your own imagination.¹⁸⁾

人は恋人や子供ができれば否が応でも外の世界や他人と接しないわけにはいかない。Myer は、ドラブル作品では“grace”は孤立の中からではなく、社会との交わりの中、他人との関係性の中においてのみやってくると指摘している。¹⁹⁾ *The Needle's Eye* (1972) の Rose は、たとえ大量生産された物でも歳月の風雨にさらされて“identity”を持つようになった張り子のライオンのように、人間の魂もそうあってほしいと願うが、²⁰⁾ Rosamund の‘identity’も人間関係の中で習熟の度合いを増していくのである。

5. 自由意志の限界と運命への受諾

次に Rosamund は‘identity’の再構築の過程として、‘free will’の限界を認識し、‘fate’との和解という着地点を経て、啓示的な‘vision’を得る。女友だちの Lydia はある時、Rosamund に、到底信じられないような非現実的な話だが実際に起こった出来事を話して聞かせる。Lydia はある日、妊娠中絶のために病院に行くが、医者は Lydia のような性格の女性は分娩するより中絶するほうが神経障害を起こしやすいと診断して彼女に中絶を許可しなかった。ところが腹をたてながら病院を出た時、彼女はたまたまバスにひかれて流産してしまう、という話である。Lydia はこんな話は Thomas Hardy の *Life's Little Ironies* に出てくるような偶発事ばかりの非現実的な話で、とても小説の材料には使えないと言う。Lydia のこの発言に対して、Rosamund は *Life's Little Ironies* には“a profound

attitude to life” (p.65) があるとしみじみ言う。起こりそうもない不思議な偶然が実際に起こってしまう現実の背後に「何か」が存在することを Hardy は見抜いていたのではと推測する。Rosamund は Hardy の運命的な世界観に共鳴しているのである。彼女は、自分の妊娠という事態に直面して、その思いもかけぬ偶発性や不慮の事態は自由意志の行使の範囲をはずれた、非理性的な秩序のわく組みを自分に知らせるための契機だったのでは、と思いをめぐらす。彼女は選択の自由があると考えるのは幻想で、抵抗できない運命の力が存在すると思に至るのである。

...now for the first time I seemed to become aware of the operation of forces not totally explicable, and not therefore necessarily blinder, smaller, less kind or more ignorant than myself. (p.67)

今になってみれば、姉の Beatrice がかつて言い放った言葉「子供を持つと決意したりはできないのよ。子供のほうで生まれる決意をするのだから」(p.67) が暗示していた意味を Rosamund は受けとめることができる。自分の意志ですべてを選び取れるという考え方はごう慢であると痛感するのである。Rosamund の運命への認識は、妊娠の偶発性以上に赤ん坊を襲った病気を通して強く実感される。その時、彼女は人間を翻弄し傷つけていく偶然の悪意に恨みと憤りをおぼえる。

I felt bitter resentment against Octavia and against the fate that had thus exposed me;...now I knew myself to be vulnerable, tender, naked, an easy target for the malice of chance. (p.120)

こうして彼女は、自由意志の行使には限界があることや、人間の自己決定能力にも限界があることを認識していくが、この考え方は、人間が理性的に自己決定できると規定するデカルト的個人主義やリベラリズムに対立する。²¹⁾

Moran は、彼女の著書の中で、ドラブル小説の中心的な関心事は人間の自由意志の無効性であると述べ、人間の人生を決定するとドラブルが考える様々な力を調べている。その力は形而上の力（運命）、自然、家族関係などを含んでいる。これらの力は人間が自由に理性的に行動することを許さない。さらにこれらの力は人間が‘identity’を形成していく時に、‘identity’には非理性的な側面があること、つまり人間は宇宙の一員であり自然の一部であり家族につながった存在であることを人間に認識させるので、‘identity’を十全に把握するために非常に役立つというのが、Moran の趣旨である。²²⁾ Rosamund は‘identity’を構築する上で、理性的な理解などが入り込めない運命という非理性の領域を抵抗しながらも受け入れ、‘identity’再構築の一助とする。

Rosamund は、美貌や知性や富のような有利と思えるものが人に恵みをもたらすと同時に苦痛の種にもなり得ることや、子供を持つことが喜びの反面、苦悩の原因ともなり得るなど、物事の両義性を熟考する。有利なことと不利なこととの区別は容易なことではないし、損も得も双方向性をもつものだと考えるようになる。そうした思考の末に、結局人間の英知で判断がつかないならば、その上、回避すらできないならば、与えられたものを甘受しようという気持ちになっていく。Rosamund は「選択の余地のないもの」(“No Choice,” p.115)に直面しそれを受け入れ和解する気持ちになった時、啓示的な‘vision’を得るのである。次の引用では、退院の日、術後の娘をタクシーに乗せて帰宅する時のRosamund の心模様が描写されている。

I now knew better than to hope I would never have to go back again, for I knew that at the best she and I were in for a lifetime of checks and examinations, but nevertheless it seemed to me that I was more happy and more fortunate now than I had been then. (pp.141-2)

Moran は、人間が自分の限界を知り人生の束縛に屈すると、知恵や強さ、さらには人間というものへの深い理解を得ることが可能だと、ドラブルによって示

唆されていると指摘する。運命への屈伏は“grace”の状態を生み出す結果となるのである。²³⁾確かに Rosamund は、出産で退院した時よりも今回のほうが幸福な気持がすると言っている。前回の退院時には二度と病院に来ることはないと単純に考えたものだが、今回の退院時には今後も Octavia の検査や診察は長く続くだろうと覚悟ができています。その覚悟は運命への甘受である。運命との和解の姿勢は、Rosamund に「なんとか乗り切れる」という ‘vision’ を与えている。

I suddenly thought that perhaps I could take it and survive....I felt that I could take what I had been given to take. I felt, for the first time since Octavia's birth, a sense of adequacy. Like Job, I had been threatened with the worst and, like Job, I had kept my shape. I knew something now of the quality of life, and anything in the way of happiness that I should hereafter receive would be based on fact and not on hope. (p.142)

人生を肯定し、生き残る自信を得ること、つまり人生の連続性 (“continuing life,” p.168) へのこだわりは、ダブル小説の基調をなすものである。²⁴⁾ 作品の結末部における Rosamund の感慨にも、今のような人間に自分を変えたものは回避できない運命への受諾に負っているという認識が読み取れる。二年ぶりに出会った George は相変わらず捕らえどころがなく二年前と少しも変わっていないように見えるので、現在の彼の姿はかつての自分自身の姿のように思えると言う。Rosamund は、もし妊娠という不意の出来事 (“accident”) がなかったら、運命 (“fate”) がなかったら、めぐり合わせ (“chance”) がなかったら、女 (“womanhood”) でなかったら今でも変わっていなかったであろう自分自身の姿であったという表現をして、自分の ‘identity’ は運命の受諾によって変化を遂げたことを強調している。²⁵⁾

さて、運命への認識は、Rosamund を深く葛藤させ、人生には解決できない問題もあるという認識へと導いていく。2章で調べたように、Rosamund は病院で悲鳴をあげることによって自己否定から脱して、彼女の情緒面での殻を突

破することができた。このあと、結果的に赤ん坊と毎日面会できるようになるが、この処遇は彼女の父親と担当医師が友人関係にあるために叶えられた特別待遇であった。以前の Rosamund ならば正義感や公正さを優先させて特別待遇など許容できなかっただろう。彼女が安い謝礼で四人の生徒の家庭教師を引き受けていたのも、自分の恵まれた生い立ちや環境への“social conscience” (p.50) からだった。他人のために何か不愉快なことをすべきという義務感は両親から引き継いだ倫理観である。

両親は社会主義者としての原則と、裕福な中産階級の人間としての良心のどがめのようなものを混合させていたので、非国教徒的な義務感や禁欲的な態度を彼らの政治や倫理に応用させていた。もっと具体的に言えば、両親は経済的には財産に恵まれ、住まいもロンドンの高級フラットで、教育的にも彼ら自身が経済学者という専門職にあり、子供たちには有名なグラマー・スクールで学ばせケンブリッジ大学を卒業させるような知的な家庭であったが、彼らは非国教徒的な勤勉、自助と自立の精神、強い義務感、禁欲的な忍耐、儉約、慈善の精神などの価値観を内面化していたので、家政婦を家族と一緒に食事させたり、病院も無料の健康保険病院ですますなど、自分たちの幸運をなんとか罰する形で不平等への埋め合わせをしていた。だから現在も不便を忍んでアフリカの新設大学に赴任しているし、娘が未婚の母になったことを医師を通して知ると唐突に帰国をとり止めにして次はインドに赴任すると告げ、娘の不都合な立場への介入を避け、黙認に徹する。さらに両親は政治的には階級的不平等を是正するための社会改革を望んでいたもので、自分の子供たちが労働者階級のロンドン訛で話し続けても我慢するし、きわめてポッシュな中産階級の人間でありながら彼らの支持政党は保守党ではなく労働党であった。

このような両親の姿勢の中に、Rosamund は偽善性を嗅ぎ取り、彼らの態度を冷淡な逃げの姿勢、表面的な人との関わり方だとして酷評している。両親のこの姿勢は、かつての Rosamund 自身の“morality” (p.145) でもあったわけだが、今では、人と親密に関われば理性だけではおさまりのつかない人間のもう一つの側面、“violence, screaming, ugliness” (p.145) が顕在化するものだとい

う人間観を抱くようになっていく。今の Rosamund は、帰国を延期してくれた両親の心情に気後れを感じるよりも、両親不在という便宜に有り難さを感じることに自体に “my growing selfishness” (p.145) を認め、それはある意味で成熟の証拠かもしれないと思う。

このように、自分の利己心を率直に認められるようになったのも、Rosamund がかつて両親の中に見ていた矛盾，“upside-down” (p.84) の状態を自分の中にも見つけて苦しんだ末のことである。彼女は出産間近の自分が貧民街ではなく高級住宅地から救急車で運ばれるのを嬉しいと感じるし、自分のように自活できる能力や環境に恵まれた人間でなければ未婚の母など人に勧めないとも言う。要するに Rosamund は自分が受け継いだ特権に感謝しそれを利用しているのである。

So, in a way, I was cashing in on the foibles of a society which I have always distrusted; by pretending to be above its structures, I was merely turning its anomalies to my own use. (pp.111-2)

何にもまして自己の矛盾や弱さを思い知るのは、毎日赤ん坊を見舞うという特権を与えられた時だった。Rosamund は人生は不平等だと痛感する。²⁶⁾ ある時、同じ特別待遇を受けている女性に対して、Rosamund は他の人たちのことをどう考えているのかと唐突に質問する。この女性から答えを引き出そうと思ったわけではなかったし、実際に女性の返事は単純明快で、他人の子供のことを心配する余裕も体力も自分にはないから、せめて自分の子供が生き延びるように自分は自分のことだけに集中する、という趣旨の返答であった。ところが Rosamund はこの女性の話に深い感動をおぼえる。彼女が感動したのは、逡巡しながらも現状を受けとめるより他に仕方がないと言うこの女性の出した結論ではなく、むしろこの女性の静かだが冷たいところを感じさせない話し方の中にあつた。“I saw what she meant; I saw, in her, what all the others meant.” (p.141) と言って、Rosamund はこの女性の背後に積もる長年の苦しみや心の

葛藤を読み取り共感をおぼえるのである。悲惨な運命や環境、不平等や差別のはびこる人間社会を読み解いていくためには、公正や正義といった概念の応用や経済的平等といった物理的解決だけでは不十分であると直感するのである。葛藤し続け、学び続けるといったプロセス自体が重要であり、他人の痛みへの共感は一己の苦しみの体験の末に想像力によって体得されるものだという‘vision’を得るのである。

6. もう一つの‘identity’— Rosamund の投影としての George

最後に、Octavia の父親である George との関わり合いについて調べてみたい。すでに詳述してきたように、自分自身に触れる、子供に触れる、他人に触れるという行為を通して、Rosamund は‘identity’を再構築してきたわけだが、彼女は最後まで George との関係を発展させることができない。

後注25ですでに指摘したように、Spitzer は、Rosamund の深層心理を探り彼女の無意識の願望に着目して、George への拒絶について次のように分析している。Rosamund は George を拒絶することで、自立して生きていくという願望と子供とだけで生きていくという願望を果たす。大人のセクシュアリティを嫌悪する Rosamund にとっては、子供はペニスの代用となり、子供は大人のセクシュアリティの防壁となる。こうした願望は妊娠という“reality”の障害をも乗り越えて達成されていく。むしろ“reality”は何度も作品中で否定され続けていると分析される。このように、Spitzer は Rosamund のセクシュアリティの未熟さに注目する。

Waugh も、Rosamund と George と赤ん坊の三者の関係は母親業の再生産に関する Chodorow の分析の実証例だと述べている。未婚の母として生きる Rosamund は、断ち切られた母との絆を慰撫するために、つまり前エディプス期の母との絆を修復するために、今度は自分自身が母となり、子供が自分の母ともなって自己の痛みの回復を図っている、という見方である。²⁷⁾

また Libby は、Rosamund の人間への愛が十分に具体化されていない点を強

調し、Rosamund が経験する葛藤は赤ん坊への愛情の中で展開されるだけで、人との愛の葛藤によってではないと指摘する。²⁸⁾

Myer も、Rosamund が George を愛していると宣言しながら彼に事実を告げず、赤ん坊を彼と分かち合えないから、その意味で Rosamund は “sexual love” においても人との関わりにおいても未成熟のままだと否定的な見方をしている。²⁹⁾

このように、Rosamund が独断的に George の父性を否定したことに対して、上記のいずれの批評家も Rosamund に対して同情的ではない。読後感として、*The Millstone* に登場する George の印象はかなり不鮮明で、Rosamund が再三 George への好意を繰り返すにもかかわらず、彼への打ち込み方には説得力がない。Rosamund が貧しい妊婦に抱いた嫌悪感や逆に親近感のこもったまなざし、入院中の子供を看病する母親への感情移入、病院やフラットで人々の感情の機微にふれた経験など、こうした描写と比較すると、George と Rosamund の関わり合いには表面的で希薄な印象が残る。

なぜ George に自分の気持ちを打ち明けることができなかつたのか、なぜ電話番号を聞けなかつたのか、なぜ彼に会おうとしなかつたのか、などの説明として、Rosamund は彼女の自己否定的で自己抑制的な傾向や、プライドが原因で自己防衛的な態度になってしまう性格などをその理由に挙げている。そこには理性のみが優先して George との情緒的関わりができない状況があるわけだが、これは Rosamund の分裂状態の段階で我々が周知してきた状況と同じである。これまで調べてきたように、彼女は ‘identity’ を再構築する途上でこの分裂を克服してきたが、George との関係においては閉じた状態に終始している。従って George の存在はいつまでも実体がない。

もちろん、Rosamund 自身が George を不透明にさせているのである。彼女は BBC ラジオから流れる George の声を聞いて寂しさをまぎらわせ、実際に彼に会おうとしないので、George は身体のない声だけの存在になっている。George の「影のような存在」については、ドラブル自身がインタビューの中で次のように説明している。自分の初期の小説は一人称で書かれているので、George は Rosamund の視点のみを通して語られ、彼自身による説明が許されて

いない。つまり George がぼやけた存在なのは Rosamund の視点が原因なのである。それと同時に、George が “a very shadowy man” である理由は、Rosamund が George を彼女の人生から閉め出し、彼を間違った立場に追いやっているのだから George を責めるのは公平ではない、そうした作家としてのドラブルの思いが彼を影のような実体のない人物に創りあげてしまったようだと述べられている。³⁰⁾

いずれにしても、George が “shadowy” であるのは、Rosamund が彼を追い出すために最後まで超自立の女の役割、“my old role” (p.163) を演じ続けたからである。しかし、もう一つの理由を、クリスマス・イヴの晩の二人の偶然の出会いを通して知ることができる。Rosamund が小説の最後に至っても George との関わりを否定してきた理由や意図を読み取ることができる。結論から言うと、Rosamund は、“shadowy” な George の姿こそが、まさにかつての自分自身 (“he was myself,” p.172) であったという認識に至るので、今度は George 自身が彼の ‘identity’ を再構築する必要性に迫られていると示唆するのである。

Rosamund は、クリスマス・イヴの晩、George が何を考えているのか知りたいと思う。もう少しのところで彼は何かを告白しかけるが、結局、心の実体を見せようとしなない。George の言葉 “I’m still doing more or less the same routine” (p.167) は、彼の日常がいつも通りだという以上に、彼自身の内面も初めて会った時から変化していないことを匂わせる。二人は凍った川の中でミイラになった二匹の魚のように、二人の間を遮断する固い空気の中で黙って見つめ合ったまま坐っている。Rosamund は可能ならばそのまま離ればなれの状態で見つめ合っていたいとも思うが、今の彼女にはそのような状態が持続しようのない現実がわかっている。

...but I knew that a connexion so tenuous could not last, could not remain frozen and entranced forever, but must melt if so left, from the mere mortal warmth of continuing life. If one of us did not move towards the other, then we could only move apart. (p.168)

今の Rosamund は、人間同士は永久に凍結したまま生きていくことなどできない、人間は関わり合うものだということを熟知している。彼女はできれば “civilized communication” (p.170) によってではなく、かつて病院で演じた奇態を再演したい衝動に駆られる。泣きながら George に愛を告白し、すがりつきたい気持ちに駆り立てられる。だが、結局、彼女はこれまでの苦しみの過程を George とともに再度繰り返す気にはなれないと結論づける。

I remembered...how I had wept and lain awake and wished to share the misery of my child's affliction and the joy of her joy, how I had endured and survived and spared him so much sorrow, and I thought that now I did not see how I could go back on what I had done. (p.169)

これからは、George 自身が彼女が経た過程をたどらなければならない。人と打ち解けない George の態度や、突き放すような冷淡な雰囲気、こうしたものは、“half-knowledge” と換言できるかつての自分自身の姿の投影であると悟って、Rosamund は George を憐れむこともしない。

There was one thing in the world that I knew about, and that one thing was Octavia. I had lost the taste for half-knowledge. George, I could see, knew nothing with such certainty. I neither envied nor pitied his indifference, for he was myself, the self that but for accident, but for fate, but for chance, but for womanhood, I would still have been. (p.172)

Rosamund は結局、George と関わり合うことなく終わる。二人は “open-ended struggle”³¹⁾ のままで終わることになる。しかしながら、Rosamund の人生に欠如しているものは、前作の *The Garrick Year* (1964) の女性人物 Emma Evans が埋め合わせている。Emma は夫と二人の幼い子供を持ち、結婚生活のストレスに苦しむ女性で、Rosamund を補完し引き継いで発展させたような人

物である。この二つの作品は一对のものとして読める。両作品を女性人物の‘identity’の再構築の観点から探っていくと、いっそう連作的な形を呈していることがわかる。この作品への考察は次回にゆずりたい。

注

- 1) Margaret Drabble, *The Millstone* (1965) (London: Penguin Books, 1968). この作品からの引用および関連箇所は本文中に頁数のみを記す。
- 2) Marion Vlastos Libby, “Fate and Feminism in the Novels of Margaret Drabble” in *Contemporary Literature XVI*, 2(Spring 1975), p.182.
- 3) National Health Service が母体となるこの病院は原則的に無料で、経済的なゆとりのある階層の人々は通常 private の病院を利用する。
- 4) Mary Hurley Moran, *Margaret Drabble: Existing within Structures* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1983), p.43.
- 5) Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: Puritanism and Permissiveness* (London: Vision Press Limited, 1974), p.17.
- 6) *Ibid.*, p.28.
- 7) Lorraine Liscio, *Female Definitions of Self and Community* (Ann Arbor: UMI Dissertation Services, 1987), pp.132-133.
- 8) Diana Cooper-Clark, “Margaret Drabble: Cautious Feminist” in *Atlantic Monthly*, 246, No.5 (Nov.1980), pp.69-75. Reprinted in Ellen Cronan Rose (ed.), *Critical Essays on Margaret Drabble* (Boston: G.K.Hall&Co., 1985), p.25.
- 9) Patricia Waugh, *Feminine Fictions: Revisiting the Postmodern* (London: Routledge, 1989), pp.8-9 & pp.19-22.
Alison M.Jaggard, *Feminist Politics and Human Nature* (Brighton: The Harvester Press, 1983), pp.27-33 & pp.39-48を参照。
- 10) Patricia Waugh, *Feminine Fictions: Revisiting the Postmodern*, p.42.
- 11) Waugh は、Nancy Chodorow, Dorothy Dinnerstein, Jane Flax, Carol Gilligan, Sarah Ruddick, Jean Baker Miller, Phyllis Chesler を挙げている。
- 12) Patricia Waugh, *Feminine Fictions: Revisiting the Postmodern*, pp.35-87.
- 13) Nancy Chodorow, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Society of Gender* (Berkeley: University of California, 1978)
ナンシー・チョドロウ著 大塚光子他訳『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』(東京, 新曜社, 1981)

- 井上輝子他編『岩波女性学事典』（東京，岩波書店，2002），p.341.
- マギー・ハム著 大本喜美子他監訳『フェミニズム理論辞典』（東京，明石書店，1999），p.41.
- ジャネット・K. ボールズ他編書 水田珠枝他監訳『フェミニズム歴史事典』（東京，明石書店，2000），pp.48-49.
- リタ・タトル著 渡辺和子監訳『フェミニズム事典』（東京，明石書店，1991），p.65.
- 14) Diana Cooper-Clark, "Margaret Drabble: Cautious Feminist" in *Atlantic Monthly*, 246, No.5 (Nov.1980), pp.69-75. Reprinted in Ellen Cronan Rose (ed.), *Critical Essays on Margaret Drabble*, p.25.
- 15) *Ibid.*, p.23.
- 16) 井上輝子他編『岩波女性学事典』，pp.6-7.
- マギー・ハム著 大本喜美子他監訳『フェミニズム理論辞典』，pp.146-147.
- Patricia Waugh, *Feminine Fictions: Revisiting the Postmodern*, pp.1-87.
- Lorna Irvine, "No Sense of an Ending: Drabble's Continuous Fictions" in Ellen Cronan Rose (ed.), *Critical Essays on Margaret Drabble* (Boston: G.K. Hall&Co., 1985), p.85.
- 17) Dee Preussner, "Talking with Margaret Drabble," *Modern Fiction Studies*, Winter 1979-80, Vol.25, No.4, p.574.
- 18) "An Interview with Margaret Drabble" conducted by Nancy S. Hardin in *Contemporary Literature*, XIV, 3 (Summer 1973), p.291.
- 19) Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: Puritanism and Permissiveness*, p.93 & p.97.
- 20) Margaret Drabble, *The Needle's Eye* (1972) (London: Penguin Books, 1972), p.399.
- 21) Alison M. Jaggar, *Feminist Politics and Human Nature*, pp.40-46.
- Patricia Waugh, *Feminine Fictions: Revisiting the Postmodern*, pp.53-61.
- 22) Mary Hurley Moran, *Margaret Drabble: Existing within Structures*, pp.3-116.
- 23) *Ibid.*, p.16.
- 24) Ellen Cronan Rose, "Margaret Drabble: Surviving the Future" in *Critique: Studies in Modern Fiction*, Vol.XV, No.1 (1973), p.12.
- 25) Susan Spitzer は、Rosamund への評価を別の観点から分析している。興味深い論文なのでここで言及しておきたい。Spitzer は、Rosamund の深層心理を探って、成長のプロセスとしての Rosamund の自己認識は彼女の子供じみたファンタジーをほかすための偽装であると述べ、それを解き明かそうとする。Spitzer は、Rosamund の無意識の願望に注目して、彼女の "ambivalence" を分析することで Rosamund が

現実や自己の成長に抵抗してまでも固執するこの無意識の願望という手に負えない力を提示して見せている。この無意識の願望とは以下の三つである。①母親と結びつきたいという前エディプス期の母との絆を取り戻すために、自分が子供の母になり子供が自分の母にもなるために子供を持ちたいという無意識の願望 ②実の父親である George を拒絶することで、自立への願望と子供とだけで生きていくという願望を果たす。これは大人のセクシュアリティを嫌悪する Rosamund にとって、子供がペニスの代用となり、子供が大人のセクシュアリティの防壁となることを意味している。③大人の女性が経験する肉体的、道徳的な拘束から自由であるために、少女のままでいたいという願望を持つ。こうした三つの願望は妊娠という現実の障害をも乗り越えて達成されていく。むしろ“reality”は何度も作品中で否定されていく。これはある種、真実に抵抗したいという我々の願いを代弁しているので、Spitzer は、*The Millstone* はおとぎ話の質を持っていると結論づけている。

Susan Spitzer, “Fantasy and Femalemess in Margaret Drabble’s *The Millstone*,” in Ellen Cronan Rose (ed.), *Critical Essays on Margaret Drabble*, pp.86-105.

26) ドラブル自身, “It [fate] is tremendously unfair” と言って, それはいつも私の心をよぎることだと述べている。

“An Interview with Margaret Drabble” conducted by Nancy S. Hardin, p.289.

27) Patricia Waugh, *Feminine Fictions: Revisiting the Postmodern*, p.85 & p.129.

28) Marion Vlastos Libby, “Fate and Feminism in the Novels of Margaret Drabble,” p.182.

29) Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: Puritanism and Permissiveness*, pp.175-176.

30) Diana Cooper-Clark, “Margaret Drabble: Cautious Feminist,” pp.21-22.

31) Lorraine Liscio, *Female Definitions of Self and Community*, p.86.